

Cobas8000(e801)を用いたエクルーシス試薬 ACTH の基礎的検討

©木村 公美¹⁾、今泉 陽子¹⁾、藤波 清香¹⁾、田中 康宏¹⁾、矢野 めぐみ¹⁾、松崎 友絵¹⁾、嶋田 裕史¹⁾
福岡大学病院 臨床検査部¹⁾

【目的】副腎皮質刺激ホルモン (ACTH) は、下垂体前葉で合成され副腎皮質に作用して副腎皮質ホルモンの合成・分泌を促進する。血中濃度の測定は、副腎皮質系の機能の判定、内分泌疾患の診断および治療にコルチゾールの測定と共に有用である。今回、院内導入を目的として ECLIA 法による ACTH 試薬の基礎的検討を行ったので報告する。

【方法と結果】測定機器は cobas8000/e801、試薬はエクルーシス試薬 ACTH (ロシュ・ダイアグノスティックス (株)) を用い、対象はメーカーの管理試料 (エクルーシス プレチコントロール MM) および ACTH 測定依頼のあった患者残血漿検体とした。再現性：管理試料 2 濃度を用いた同時再現性 (n=20) の CV% は 0.83~0.90%、日差再現性 (20 日間) の CV% は 0.63~1.13% であった。希釈直線性：患者高値検体を低濃度血漿にて段階希釈し 128 pg/mL までの希釈直線性を確認した。干渉物質の影響：ビリルビン、乳び、リウマチ因子では影響が見られなかったが、ヘモグロビンで 208 mg/dL 添加時に約 10%

の低下を認めた。定量限界：定量限界は CV10% では 0.65 pg/mL、CV20% では 0.26 pg/mL であった。相関性：対象は患者検体 (48 例) とし、血漿分離直後に測定した結果と現行法 (外注検査・分析装置 cobas8000/e801) の相関性を確認した。回帰式は $y=1.04x+1.79$ 、相関係数 $r=0.998$ であり、現行法に対し高値傾向を示した。現行法の外注検査では検体を -20°C に凍結して搬送、測定しているため、48 例のうち 22 例を -20°C で凍結保管し、室温融解後に測定した結果と血漿分離直後の結果を比較した。結果、回帰式は $y=0.94x-1.40$ 、相関係数 $r=0.992$ であり、凍結融解では血漿分離直後に対し、低値傾向を示すと推察された。

【結論】エクルーシス試薬 ACTH の基礎的検討は概ね良好な結果が得られた。溶血で測定値が低値となるため、注意する必要がある。院内導入により、迅速な報告ができ臨床への貢献が期待できる。
連絡先：092-801-1011 (内線 2263)